

『世説新語』と魏晉文化

— 説話に見る人物評價の實相 —

大橋由治

一 はじめに

『世説新語』は南朝宋の劉義慶が監修した志人小説集である。書中では主に後漢から東晉にいたる間の士族であり文人でもある人々の言行に關わる軼事を記している。内容は概ね漢魏以後の筆記小説と諸子、史傳中の物語的要素のあるものから採集しており、各方面にわたって當時の氣風や習俗を反映している。よって多分野の參考に値する内容を有している。

書中の大部分は魏晉文人の清談玄學と人物評價に關するものを記載している。清談玄學に關する言動は主に「言語」「文學」の兩項に収録されている。これらの説話を通して、清談玄學の具體的な内容を知ることができるし、清談の具體的な形式を知ることができる。人物評價に關するものは主に「賞譽」「品藻」の兩項に収録されており、そこから人物品評の氣風が當時の社會にあたえた影響を見いだすことができるし、同時に人物品藻がすでに漢魏の社會的政治的な必要から轉じて審美的要求となっていたことを説明している。

さらに玄學、清談と關連して書中では魏晉文人が苦悶のすえとった放達行爲や奇妙で玄遠な言行を多く記載しており、彼らの審美的人生態度や鮮明な個性を描出している。これらの行爲は魏晉に生きた文人の精神を代表しており、魏晉風

度の實際が映し出されているのである。まさに『世説新語』は魏晉文化の百科事典とも言うべきものであり、魯迅に名士の教科書と稱される所以である。^{*1}

上記をふまえ、本論考では『世説新語』を資料として漢から魏晉にかけて人物評價がどのように行われていたのか、内容がどのように變化していったのかについて確認することを目的としている。先述の通り人物評價に關しては品藻篇が中心的な資料となるが、ただ關連した記述は各篇に散見しているため、複數の篇にわたって事象を追うことでより有効に資料として活用できることも兼ねて本論考で示してみたいと思う。なお今後他の事象についても論じる豫定であるので本論考の冒頭に『世説新語』の解題と作者紹介を付記する。

二 作者劉義慶の生涯とその文學活動

1 劉義慶の生涯

『世説新語』は、南朝宋の臨川王劉義慶の監修したものである。まず本傳をもとにその生涯を概観しておきたい。^{*2} 劉義慶は東晉の安帝の元興二年（四〇三）に生まれ、宋の文帝の元嘉二十一年（四四四）に卒した。祖籍は彭城（現在の江蘇省徐州市）であるが、後に丹徒の京口（現在の江蘇省鎮江市）に移住した。劉義慶は劉道憐の次男であり、劉道憐は宋の武帝劉裕の年かさの弟で、長沙王に封ぜられた。しかし、劉裕の年少の弟劉道規に男兒がなかったため、劉義慶をその嗣子としたのである。

劉道規は若いときには大志を抱いていたし、才能も宗室の上位に居り、劉裕からも深く愛されていた。東晉後期に劉裕が桓玄を討伐したとき、劉道規の協力により桓玄を撃ち破ったのである。これにより劉道規は振武將軍・義昌太守に

封ぜられた。この後もずっと要職を歴任したが、不幸にも義熙八年（四一二）病没した。劉裕が宋を建國した後、劉道規に大司馬を贈り、臨川王に追封した。もともと宋の文帝劉義隆は幼いとき劉道規に育てられたのであるから、劉裕は劉義隆に劉道規を繼承させる算段をしていたが、みなが禮教の規定に照らし、一人が同時に二つの家督を繼承できないと考えた。そこで劉道規は劉義隆を劉裕に返し、劉義慶を繼承者に定めたのである。

劉義慶は幼年期に宋の武帝劉裕から認められ、劉裕は常々小さな劉義慶の頭を撫でながら愛おしそうに「これは我が劉家の豊城の寶劍である（此我家豊城也）」³と言っていた。

十三歳のとき、劉義慶は襲封して南郡公となった。給事に除せられたが、これは受けなかった。

義熙十二年（四一六）劉義慶十四歳のとき、長安への討伐に従軍し、さらに輔國將軍、北青州刺史を授けられたが、この任につく前に改めて督豫州諸軍事、豫州刺史に徙され、さらに督淮北諸軍事を加えられた。

武帝の永初元年（四二〇）十八歳のとき、臨川王を襲封し、侍中に召された。

元嘉元年（四二四）二十二歳のとき、散騎常侍、祕書監に轉じ、度支尚書に徙され、丹陽の尹に遷り、輔國將軍、常侍はもとのまま加えられた。その當時庶人の黃初というものの妻趙氏が息子の妻を殺すということがあった。これは本來なら死罪に處せられるところ、たまたま恩赦があり死罪を免れたが、しかし彼女の孫が母親の復讐を爲すを防ぐために遠くの場所へ遷さなくてはならなかった。これに對して劉義慶は上書して言った、『周禮』の規定に照らし合わせると、父母が他人に殺害された仇は恨みが深いので必ずこれを海外に避けさせる必要がある。もし繁華な市場で遭遇すれば、凶器をもって向かい合うことにもなる。これは父母を殺された仇が莫大な恨みであるためで、仇を報いないわけにはいかないからである。しかし親戚が殺戮をなしたのでは、骨肉がともに殺し合うことになります、よって道は常憲に乖離し、記述には定まった規準は無く、法外において勘案し、人情で裁かなくてはなりません。そのうえ禮には過失

のあった者にも寛恕が有り、法律にも祖宗と仇を爲すの條文が有りません。ましてや趙氏のこのたびの殺人は、もともと酒に酔って手元がくるったものですし、事件は老齡であるが故に起きたものです。どうして老いぼれた老婆に行路の辛苦を等しく與える必要がありません。私が思いますにこの孫が悲しみや恥じいる氣持ちを抑えることは、子の道義に違ふことではありませんし、同じ地域に居住したとしても、孝道に違ふものではありません」と。これは情理に合致しており、大方の支持を得たのである。

元嘉六年（四二九）、劉義慶は尙書左僕射を加えられた。

元嘉八年（四三一）、太白星が大臣の象徴の右執法星を横切るといふ現象が起きた。古代ではこれは右僕射にとって不祥の兆しと考えられていた。劉義慶は左僕射である自分に災禍が及ぶことを心配し、官を辭めて外鎮に出ることを希望した。宋の文帝ができる限りの解釋をし、こうした天象に關する解釋は時にはそれほど精確ではなく、これまでもこうした現象は出現したがどんな災禍も起きなかつたと説いた。しかし、劉義慶はどうしても納得せず、仕方なく劉義隆は劉義慶の要求に従いこれを認めた、そしてさらに彼に中書令を加え、前將軍に進めたのである。

劉義慶は京城に九年居た後、出でて使持節、都督荆雍益寧梁南北秦七州諸軍事、平西將軍、荊州刺史と爲った。この荊州の地は領地が廣く兵が強く、物産も豊富で、ほとんど朝廷の半ばを占めるほどであつたため、高祖はずつと自分の實子に鎮守させていた。劉義慶は宗室中の名聲が高かつたので特別にここを授けられたのである。彼は性質が謙虚で、鎮に赴任してから去るまで、贈答品は一切受け取らなかつた。彼は任地において奢侈や派手な行動をしたことがなかつた。ただ彼は晩年に佛教に熱中し、このためには財物を惜しまなかつた。彼は少年の時に乘馬を好んだが、歳月を経て經驗を積むに隨い、處世の困難さはけして乘馬のように身輕ではないと感じ、結局二度と馬に跨らなかつた。

元嘉十二年（四三五）、朝廷は内外の群官に人才を推舉させた。劉義慶は上書して武陵の龔祈と處士師覺を推舉した。

この兩人はともに才能と學識があり、志を高く掲げた高潔の士であった。こうした人々を推舉したことからも、劉義慶の人格を重視する志向を伺うことができる。

元嘉十六年（四三九）、劉義慶は改めて散騎常侍を授かり、數郡を都督し、江州刺史に任じられた。

元嘉十七年（四四〇）、南兖州刺史に任じられ、ついで開府儀同三司（太師、太傅、太保の三師に次ぐ最高級官階）を加えられた。

劉義慶は廣陵（江蘇省揚州）にいるときに不幸にも病に罹った。その時ちょうど白虹が城を貫き、野鹿が役所に入ってきた。劉義慶は迷信を信じており、こうした不吉な兆候を見るに及び、心中はかなり恐れおののき、京城にもどれるように要求した。宋の文帝は彼の要求に應えたが、歸京後もない元嘉二十一年（四四四）病に没した。享年四十二歳であった。朝廷は侍中、司空を追贈し、康王と諡した。

2 劉義慶の文學活動

劉義慶は文學家でもあった。『宋書・劉道規傳』で劉義慶の文學事跡を紹介して言う、彼は人となり簡素で、特別な嗜好は何もなかったが、文義だけは愛好した。彼の作品は多くないし、文才に恵まれていたとも言えないが、宗室の代表格とするには十分であると。劉義慶は自身が臨川王であることと官途の要職に居ることを利用して、文學の士を招聘することにつとめ、遠近を問わず力を盡くして集めた。太尉の袁淑は、當時にあっては文名盛んであった。劉義慶は江州に居たときに袁淑を諮議參軍に召した。その他の當時にあって有名であった文學家、たとえば陸展、何長瑜、鮑照などは、ともに文學史上にかくかくたる名聲をとどめる一代の文學家であるが、劉義慶は彼らをすべて自分の身邊に招き、官職を委ね、文學を探究し、自身の身邊に文學サロンを形成したのである。これにより、宋の文帝ですら劉義慶に手紙を書くときは、再三字句を斟酌させ、ひたすら劉義慶に瑕疵を指摘されることを恐れ、鷹揚な人々から失笑を買った。

『宋書・劉道規傳』の記載に依れば、劉義慶の著作に『徐州先賢傳』十卷がある。劉義慶の祖籍は彭城であって、もと徐州に屬していたので、徐州の先賢のために傳を作り、善言善行を書きとめたのである。さらに班固の『典引』をまねて『典紋』を著し、宋王朝の建國の歴史を賞賛した。このほか『南史・劉道規傳』には劉義慶の著作にはさらに『集林』二百卷があると記載してある。これはおそらく森羅萬象について記述した類書だったようである。このほかに『世說新語』十卷を著したのである。『世說新語』を除いたほかは、すべてすでに佚傳してしまっている。

現存の各種版本の『世說新語』の作者はともに劉義慶と記されているが、この點にはやや疑問がある。當時劉義慶は身邊に多くの著名な文人を集めていたことから、この書はあるいは必ずしも完全に劉義慶自らの手に爲ったものではないか、あるいは彼とその身邊の文人達が一緒に編纂したのではないかと考えられるからである。先に言及した袁淑、何長瑜、鮑照等當時一流の文人は、みな『世說新語』の編集に參與したと考えるのが至當ではないだろうか。魯迅は「しかし『世說新語』の文章は、間々裴郭一家の書に書かれていることと同じであり、殆ど『幽明錄』、『宣驗記』と同様の書であって、舊文を纂輯しただけで、自らが書いたものではない。『宋書』は劉義慶は才詞多からずして、文學の士を招聚し、遠近必ず至ると言う、そうであれば諸書あるいは聚手に成ったかもしれないが、はっきりとはわからない」と言っている。⁴魯迅が言う「裴郭一家」とは東晉の裴啓の『語林』と郭澄之の『郭子』を指している。『世說新語』の書中にこの二書と郭頌の『魏晉世語』、袁宏『名士傳』の内容が引用されていることから、すぐさまこの見解にしたがう事はできないが、『世說新語』の作者を理解するための一つの意見として、参考に値するものである。恐らく劉義慶周辺の文人達が『世說新語』の編集作業にも参加したのであろう。こうしたことから劉義慶は集團を組織して編集したのであるから、劉義慶を『世說新語』の監修者とするのが妥當であらう。

三 『世説新語』の書名、版本、校注と項目分類

1 書名について

『世説新語』にはかつて『世説』、『世説新書』、『世説新語』の三つの名稱があった。

『隋書・經籍志』、『舊唐書・經籍志』と『新唐書・藝文志』はともに本書を『世説』と著録している。本書の唐代寫本殘卷の末尾には、『世説新書』と書かれている。宋の紹興八年（一一三八）董僊刊本より、本書の書名は一律に『世説新語』と書かれるようになる。どうしてこのように三つの名が存在するのだろうか。清代以來、この問題について多くの人が考察したが、だいたい一致した見解を示している。

清代の學者は、この書はもと『世説新書』と呼ばれており、『世説』は『世説新書』を略したものだとしている。理由はもっとも早く『世説』を書名として用いたのは、漢の劉向であり、彼は古書を校録するとき、かれが自ら編次したものには、すべてもとの書名のあとに「新書」を加え、未編集の舊本の原名と區別していた。例えば『孫卿新書』、『晁氏新書』、『賈誼新書』などである。『漢書・藝文志』儒家類には劉向の『世説』を著録しているものの、これは現在亡佚してしまっているが、その體例は劉向の『新序』、『說苑』の類にはずれず、春秋から秦漢までを記述したものと推測される。劉義慶は劉向の『世説』を繼いで著すつもりで、劉向の方法を踏襲したのであり、書名を『世説新書』とし、劉向の『世説』と區別したのである。しかし劉向より以後、古書名の後にあった「新書」の二字は、史書中では往々にして省略され、『孫卿新書』などは『漢書・藝文志』では只だ『孫卿子』と題しているし、『賈誼新書』は『漢書・藝文志』では『賈誼』、『隋書・經籍志』では只だ『賈子』と題するなどである。こうした慣例に則り、『世説新書』は『隋

書・經籍志』から、『世説』とも省略して呼ばれるようになったのである、と。⁵

『世説新語』という名稱が何時ごろ出現したか、どんな人が改定したかについては、もはや明らかにし得ない。『四庫全書總目提要』は言う、「知らず何れの人『新語』と改爲せるか、蓋し近世の傳えるところならん。然れども相沿うこと已に久しければ、復た正すこと能はず」と。宋の汪藻の『世説敘錄』は『世説新語』の書名の下に注釋に言う、「晁文元、錢文僊、晏元獻、王仲至、黃魯直の家本、皆『世説新語』に作る」と。そうであれば、『世説新書』を『世説新語』に改めた時期は、宋の初年よりおそいとは考えられない。

2 版本について

『世説新語』の版本の流傳は、何回かの大きな變動を經ている。

史書上で最初に『世説新語』を著録したのは『隋書・經籍志』である。その所に言う、「『世説』八卷、宋の臨川王劉義慶の撰。『世説』十卷、劉孝標注」と。これから八卷本と十卷本が本書の初期の版本であることがわかる。この二種の版本はともにすでに亡佚しており、關連資料にもとづいて推測するほかない。『隋書・經籍志』の上面に記された内容から、八卷本はおそらく劉孝標が注を加える以前の原本と思われる。十卷本については、唐代の寫本の『世説新書』の殘卷がその書の「規箴」第十から「豪爽」第十三までの三つの項目を保存している。その卷末には『世説新書』卷第六」と標示してある。この版本は劉孝標の注を包括したもので卷六に第十から第十三までの項目が含まれていることから、これはおそらく十卷本の傳本である。しかし、その全貌は依然として不明である。この本はもと日本に傳わっていたもので、二十世紀の初頭に羅振玉がその影印を出版したのである。

北宋の時、晏殊（字は元獻）は十卷本『世説新語』の整理を行い、前九卷と重複する第十卷の九篇を削ったのだが、この版本は現在すでに散逸している。⁶南宋の紹興八年（一一三八）、董饒が晏殊の整理した本を基にさらに手を加えた

ものが、今日我々が見られる宋の紹興刻本である。ただこの版本も原書ではなく、日本の尊經閣叢刊中から影印した宋の紹興八年の董僥刻本である。文學古籍刊行社と中華書局がそれぞれ一九五五年と一九六二年にこの本を影印出版している。この版本は三巻に分かれ、本文の後に汪藻撰の『敍録』二巻があり、『考異』と『人名譜』各一巻がその中に含まれている。そのほかに南宋淳熙十五年（一一八八）には、陸游も『世說新語』を刻印しているものの、すでに散逸しており、明の嘉靖年間にも吳郡の袁褫が陸游の刻本に基づいて復刻した。この本も三巻に分けられているが、毎巻がさらに上下に分けられている。これが今日我々が見られる嘉趣堂本である。清の道光年間には、浦江の周心如が嘉趣堂本を復刻しており、これは袁本に對して訂正を加えている。これが今日流傳している紛欣閣本である。光緒年間には長沙の王先謙がこの紛欣閣本に基づいて出版しており、後部に王先謙が作成した『校勘小識』と葉德輝編の『世說新語注引用書目』や、唐宋の類書中から抜き出された『世說新語佚文』を附している。これが思賢講舍本である。そのほかには清の徐乾學の傳是樓所藏の宋淳熙十六年（一一八九）の湘中刻本があり、これは董僥刻本とは似ているが嘉趣堂本とは大きく異なるものである。沈寶硯に校記があり、涵芬樓影印の嘉趣堂本の後に見える。

かつて宋の紹興八年の董僥刻本を影印出版した以外に、上海古籍出版社が一九八二年に思賢講舍本を影印出版し、後部に董刻本後の汪藻『敍録』と羅振玉が影印した『唐寫本世說新書殘卷』を附している。一九八三年には、中華書局が餘嘉錫の『世說新語箋疏』を出版したが、これは思賢講舍本を底本として、董刻本、嘉趣堂本、沈寶硯本で對校している。箋疏の比重は、文章の讀解にあるのではなく、史實を考察する事を重視している。『世說新語』原書と劉孝標が注記した人物の事跡について、一々史籍を調査し、異同を校勘している。原書の不備については、ほぼ増補を加え、異聞を廣めている。事が道理に乖離しているものには、評論を加え、是非を明らかにしている。さらに同時に『晉書』に對しても駁正を加えている。よって學術的な價值の高いものとなっている。一九八四年には、中華書局はさらに徐震堦の

『世説新語校箋』を出版した。これは嘉趣堂本を底本とし、唐寫本、董刻本、沈寶硯藏本、明の凌濛初の刻批本、思賢講舍本等を校訂に用いている。その校箋は文章を讀解する事に重點がおかれていると同時に、史籍と本書との異同を調査している。よって餘嘉錫本と互いに補うことができる。

3 校注について

最初に『世説新語』に注を施したのは南朝齊の敬胤であり、かれの注本はすでに亡佚しており、現在ではわずかに五十一條を存するのみだが、そのうちの十三條に注が無いことは、汪藻の『考異』に見える。今に傳わるもので最も重要な舊注本は、南朝梁の劉孝標の注本である。劉孝標は群書を博搜しており、引用する史書、地志、家傳、譜牒等の書籍は四百餘種、詩賦雜文七十餘種にのぼる。これらの古籍の十のうち八九まではすでに亡佚しており、劉孝標の注は注文自體が該博で詳密であるという特徴のほか、その引用書の豊富さがその特徴である。いまのところ見ることで、『世説新語』の重要な版本はすべて劉注本であり、こうしたことから劉孝標の注と『世説新語』原書はすでに同化しており、分けて考えることはできないのである。

宋代以後、『世説新語』の評點本が現れ始める。最も早く『世説新語』に批點を施したのは南宋の劉辰翁である。彼と劉應登、王世懋等の批點は、明の凌濛初刻印の套印本八巻に見える。このほかにも明の王士貞の批點本八巻があり、萬曆十四年（一五八八）餘碧泉が刻印している。李卓吾の批點本二十巻は、明の萬曆十四年に刻本がある。これらの評點本はその後重印されていない。

4 項目について

『世説新語』の現存する版本はすべて三十六の項目に分けているが、これは改變後の様相である。もとは四十五篇、三十八篇、三十九篇等數種類が存在していた。四十五篇本は元來の十巻本で、董僥の跋語には、「古『世説』は三十六

篇。世に傳はる所は厘めて十卷と爲し、或いは四十五篇に作る」と言う。三十八篇と三十九篇本はともに汪藻の『敍録』に見えそこで「三十八篇、邵本は諸本の外に于いて、別に一卷を出し、「直諫」を以て三十七と爲し、「奸佞」もて三八と爲す。唯だ黃本にのみこれ有り、它本は皆録さず。三十九篇、顔氏、張氏は又た「邪諂」を以て三十八と爲し、別に「奸佞」一門を出して三十九と爲す。按ずるに二本は十卷の後に于いて、復た一卷を出し、「直諫」、「奸佞」、「邪諂」の三門有り、皆な正史中の事にして注無し。顔本は只「直諫」を載せるのみにして、餘の二門は其の事を亡ず。張本は又「邪諂」を昇せて「奸佞」の上に在り、文皆な舛誤にして讀むべからず、故に它本皆な削りて取らず。然れども載する所も亦た正史と少しく異なる者有り、今亦たこれを去り、定めて三十六篇を以て正と爲す」と言っている。

四 魏晉人物品藻の實際

1 品藻を重視する風潮の形成

魏晉の人物品評は品藻（人物の品定め）と呼ばれ、漢代以降に興起した一種の社會的活動であり、それはもと漢代の人材登用制度と關わるものであった。漢代の人材を任用するルートは主に「察舉」と「徵辟」の二つの方式であった。察舉は地方が人物に對して考察し、評議することを通じて、人材を下から上げる推薦である。徵辟は中央と地方政府によって上から命を下して人才を發掘させ、任用するものである。兩者の方法は異なるが、ともに人物の品行に對して考察を加え、評議する點で共通している。これはつまり人物品評と社會の實際の需要とを連關させたものであり、人物品藻の社會的意義を大々的に増強させ、そのため知識層に直接的な制約と影響をもたらした。特に當時の地方での察舉は往々にして名聲の高い名士に掌握されていた。『後漢書・許邵傳』には「初め、邵と請（邵の從兄）俱に高名有り、好

んで共に郷黨の人物を核論し、毎月輒ち其の品題を更む、故に汝南の俗に月旦評有り」とある。以後人々は人物品評を「月旦評」と呼ぶようになったのである。

こうした社會風潮のもとでは、人々は自分が少しでも高い評價を得るように切實に願うようになる。これについて『世説新語』には迫眞の記述が有る。例えば品藻篇中には、當時の人々は温嶠を二流中の上品に位置づけていたので、批評をする名士たちが、一流の人物について談じることが終わろうとすると、温嶠はいつもどうもぼつが悪くていたたまれなかったことを記載する。これはかれが、自分自身が二流に居ることに對し、いかに恥ずかしく思い、そして不満に感じていたかを物語っている。したがって當時の人々が他人の自分に對する評價をいかに重視していたかを見て取れる。

人々が名聲をかくも重視していたために、ある人は一流を自任して、人々の注目を引いた。品藻篇ではさらに以下の話を載せる。大將軍桓温が清談の大御所劉惔にたずねて「近頃會稽王司馬昱は會話のレベルが非常に進歩したと聞いたのだが、ほんとだろうか」と言った。これに對して劉惔は答えて「たしかにとても進歩した、しかし依然として二流の人物だ」と言った。桓温はさらに「では誰が一流の人物なのだ」とたずねた。これに對して劉惔が「もちろん、私のよきな者だ」と言った*。

言論中で自ら優れていると感じ、自分が他人に勝っていると見なす人に至っては、とても多い。殷浩を例に取れば、晉の簡文帝が彼と裴頠を比べてどうかとたずねた時、彼の回答は「故より當に勝るべきのみ（もちろん私の方が上でしよう）」であった。外部の輿論の殷浩と桓温に對する評價は大差なく、二人は名聲を等しくするとみなされていた。しかし二人は互いに納得せず、桓温は殷浩に「卿は我に何如（きみは私と比べてどうかね）」と訊ねた。殷浩は「我は我と周旋すること久し。寧ろ我と作さん（私は私と長いことつきあっている、どちらかと言えばやはり私と言うことにして

おこう^{*10}」と答えた。しかしして桓温は他の人に對して「少き時吾れ浩と共に竹馬に騎し、我棄て去れば、浩輒ちこれを取る、故に當に我の下に出づべし（幼いとき私は浩と一緒に竹馬に乗って遊んだが、私が竹馬を棄てれば、浩はそれに乗った、だから浩は私よりも下なのだ^{*11}）」と言った。これらはみな人物品藻の風潮が人々の心理状態に重要な影響を及ぼしていた事を反映しているのである。

2 品藻の方法

書中の説話の中からはさらに當時の人物品藻の具體的な方法とその過程を見いだすことができる。あるときは直接的に人物の容姿に據って評價を行った。容止篇では劉惔が桓温について評價して「鬢は反狷皮の如く、眉は紫石稜の如し。自ずから是れ孫仲謀・司馬宣王一流の人なり（鬢は逆立ったはりねずみの毛のようで、眉は紫水晶のようだ。これは孫仲謀や司馬宣王のたぐいだ^{*12}）」と言ったことを記している。彼は容貌から孫權、司馬懿と桓温の三人の優れた才知や遠大な知略が同等であると判断したのだが、これはまさに外見からひとの才能や性質を確認した例である。そのほかに潘滔は、王敦が少年の時に目が蜂目（鋭い目、凶悪な人相）で、聲が豺狼のようであることから、その野心家の本質を見抜いた^{*13}。王渾の妻鍾夫人は娘のために壻を選ぶときに、形體と骨相から、才能が有っても壽命が長くないので娘を嫁がせることはできないと判断した^{*14}。これらはともに同様の方法である。

そのほかの方法は、會話を通して人物を品評する法である。劉劭は『人物志・材理』中で、言により人を知るのも人物品藻の重要な過程だと見なしている。玄學が興起し、清談が盛行した時期では、言論の舌鋒がより重要であったことは明らかである。『世説新語・文學』には吳の張憑が洛陽に上り劉惔を訪問したとき、初めは冷遇されたが、すぐに舌鋒の鋭さで盛んな榮譽を勝ち取り、劉惔や王濛等の清談の重鎮を驚かせたばかりでなく、晉の簡文帝ですら直に談話をした後で、かれを「勃率（言論の緩やかな様）として理屈を爲す」と稱賛し、すぐに太常博士に任用されたことを記し

ている。^{*15}

さらにもう一つのやり方は、人物の行爲自體に基づいて人物を考察し評價するものである。漢末以來一部に名實の伴わない似非士人がいたことにより、多くの玄學者は特に人物の行爲によって人格の尊卑を判断するように注意した。例えば、

華歆・王朗俱乘船避難。有一人欲依附。歆輒難之。朗曰、「幸尙寬、何爲不可。」後、賊追至、王欲捨所攜人。歆曰、「本所以疑、正爲此耳。既已納其自託、寧可以急相棄邪。」遂攜拯如初。世以此定華王之優劣。^{*16}

華歆・王朗俱に船に乗りて難を避く。一人 依附せんと欲するもの有り。歆輒ちこれを難しとす。朗曰く、「幸い尙ほ寬し、何爲れぞ可ならざらん」と。後 賊追ひて至るに、王攜へし所の人を捨てんと欲す。歆曰く、「本疑ひし所以は、正に此が爲のみ。既に已に其の自託を納る。寧ぞ急を以て相棄つべけんや」と。遂に攜拯すること初めの如し。世 此を以て華・王の優劣を定む。

王朗の行爲は首尾一貫していないが、華歆の行爲は首尾一貫しており、この二人の行爲を比較して評價を爲し、人々を信服させた。さらに華歆と管寧が畑を耕したり讀書をしていたとき、管寧は外物には一切惑わされないで専念していたが、華歆は一々見た事に反應した。^{*17} 桓温が兵士を伏せ宴會を開き謝安と王坦之を誅殺しようとしたとき、王坦之はあわてふためき、謝安は毅然としていたため、それまで甲乙つけがたかった二人の優劣が決した。^{*18} こうしたことから人々がいかに行爲に據って評價を下していたかがわかる。

しかし、書中に記載される人物品藻の價值が最も大きいのは、やはり容姿や人格等の人物象に關する説話であり、人

物品藻が社會上の政治的に必要なものから審美的行爲へと移り變わったという時代の特色を鮮明に表している。以下ではその點について見てみたい。

3 品評基準の移り變わり

漢末以來、統治組織内部の力關係に變化を生じていた。政府の集權力が大々的に縮小し、曹魏政權は政治、經濟上で門閥貴族の支持に頼らなくてはならなかった。なぜならば當時の地主である士族の經濟力は社會上重要な位置を占めていたからである。これにより、魏初に推行された九品中正制は、すぐに門閥士族階層に壟斷されてしまった。『晉書・劉毅傳』に言う「上品に寒門無し、下品に士族無し」の情況は、當時の大族がすでに物品藻と官吏任用の權益を握っていたことを證明している。こうした狀況では九品中正制は門閥士族が結黨して行う惡事を美しく飾るための定型化したプログラムに成り下がり、物品藻は社會および政治に對して持っていた重要な意義を無くしてしまったのである。この變化は、人々に物品藻の見方を實用的、功利的なものから、人物の個性、知恵、才能に對する過剰なまでの重視と子細な觀察にもとづく批評へと轉じさせることになる。これによって魏晉時代の物品藻にさらに功利を超えた審美的色彩を帯びさせたのである。こうした事象の詳細は、『世說新語』中から看取することができる。

後漢の「清議」のころでは人物に對する品評は德行を重視する政治的人物品藻であったが、漢末から魏初での曹操が提唱した「唯才是舉」の原則に基づく九品中正制は政事の才能を重視した人物品藻であり、魏の正始（二四〇—二四九）以後の人物品藻は人物の主體的個性やそれと關わる情感や才能を首位に置くものであった。それはつまり美的觀念に十分な注意を払いながら、個性や情感、才能に品評を加えていくものであった。例えば、

桓宣武平蜀、集參僚置酒於李勢殿、巴、蜀縉紳、莫不來萃。桓既素有雄情爽氣、加爾日音調英發、絃古今成敗由人、

存亡繁才。其狀磊落、一坐歎賞。既散、諸人追味餘言。于時尋陽周馥曰、「恨卿輩不見王大將軍。」^{*19}

桓宣武蜀を平らげ、參僚を集めて李勢の殿に置酒す。巴蜀の縉紳、來たり萃まらざるもの莫し。桓既に素より雄情爽氣有り、加ふるに爾の日音調英發し、古今の成敗は人に由り、存亡は才に繋るを敍す。其の狀磊落、一座嘆賞す。既に散じ、諸人餘言を追味し、時に于いて尋陽の周馥曰く、「恨むらくは卿が輩の王大將軍を見ざることを」と。

桓温の言う「古今の成敗は人に由り、存亡は才に繋る」の内容は、政治や軍事と關わるものだが、文の重要ポイントが「人」「才」にあることは、かれの關心が人の才能にあることを説明している。ましてや座を共にした人々の興味は、主として桓温が非常に磊落で雄情爽氣（男らしくさっぱりしている）であることに在るのであり、そこで一座が嘆賞したのである。この美的な指向は實用的な政治評論より勝るのである。

人格美が人物品藻の中で徐々に主導的な地位を占めていったことから、人格美における才能と情感は特別な注意を引くようになった。品藻篇には「孫興公、許玄度は皆一時の名流なれど、或ひと許の高情を重んずれば則ち孫の穢行を鄙しみ、或ひと孫の才藻を愛して許に取る無し」とある。^{*20}もし漢代の批評家にこの二人の人物を品評させたならば、すくなくとも孫綽の「穢行」は徹底的な批判をうける原因となるであろう。ところが晉代の人にとっては、こうした「穢行」はけしてその才藻の評價に影響しないのである。許詢の「高情」に至ってはなおさらのこと當時の人々が普遍的に追求した人格美であった。

桓子野每聞清歌、輒喚「奈何。」謝公聞之曰、「子野可謂一往有深情。」^{*21}

桓子野清歌を聞く毎に、輒ち「奈何」と喚ぶ。謝公これを聞きて曰く、「子野一往に深情有り」と謂ふ可し」と。

王長史登茅山、大慟哭曰、「琅邪王伯輿、終當爲情死。」^{*22}

王長史茅山に登り、大いに慟哭して曰く、「琅邪の王伯輿、終に當に情のために死すべし」と。

宗白華は「論『世説新語』和晉人的美」^{*23}の中で、「情に深き者は、ただ世界・人生について至深で名すことのできな
い哀感を體感できるだけでなく、これを擴充して、耶蘇や釋迦のごとく天を悲しみ人を憫れむほどになれるのである。
つまり快樂の體験も深く肺腑に入り、心魄をおどろかすのである。淺俗薄情の人は、深く悲しむことすらできないばか
りでなく、所謂眞樂をも知らないのである」と言っている。

魏晉の人は人格、情感、才藻が構成する人格美に注意しただけでなく、こうした人格美からかいま見える内に秘めら
れた氣質の方に、より注目していたのである。これはつまり彼らの玄學的な人生態度と關わる氣質である。こうした氣質
は、實質上老莊が提唱した功利を超越した審美的な人生態度を表出したもので、それは個人の精神的自由と審美的性質を
體現しているのである。その具體的表現は、外でもなく魏晉文人の放達な生活の中で示された洒脱で飄逸な氣品・風格・
態度・容貌である。こうした點は當時の人物品藻中のひとつの重要な審美標準であった。謝安の、風起浪湧し、衆人が
落ち着き無く躁動している状態での悠閑自得、桓温が設けた鴻門の宴上での泰然自若とした態度、淝水の戰勝報告を聞
くときに顔色一つ變えなかつたことなど、^{*24}すべてこうした氣質を表しているのである。

さらに、王戎は「玄談に妙なり」という王衍に對して品評して「太尉の神姿高徹、瑤林瓊樹の如し、自然是れ風塵外
の物なり」と言った。山濤に對して、王衍は老莊の著作を讀む必要が無く、ただ山濤の吟詠を聞けば、老莊の言わんと
することに合致しているとした。裴楷は山濤に對して品評して「山に登りて下を臨むが如し、幽然として深遠なり」と

言った。^{*25} こうした玄學的氣質を體得した人物には、雄大な自然の中から適切な比喩を探しだし、玄學的な人格の魅力と奥深い本質を表現しているのである。なぜならば物に拘泥しない自由な精神の最終的な歸結は、時空を超越した永遠であるからである。玄學的氣質とは換言すれば有限、有形の存在でありながら、無限を追求することのできる能力のことであり、彼らはそれを追求し體現していたのである。

五 おわりに

『世説新語』をもとに魏晉時代に盛行した人物品評の形成とその推移を見てみた。もと人材登用制度のために始められた人物評價であったが、評價の主體を有力者に壟斷されてからはその社會的意義は薄れていった。これにともなつて評價の基準も道德的なものから審美的なものへと移り變わっていったことを説話から読みとることが出来る。そこには思想書や歴史書からだけではうかがい知ることの出来ない實相が描かれているのである。

こうしたことから、『世説新語』は項目ごとにテーマが設定してあり、類似した説話が集められているのだが、他の項目にも關連する説話が收められているため、一つの視座を定めたら各項目を横斷的に見てみるのが魏晉文化を理解する上でのより効果的な読み方であると言える。

例えば、以下は『世説新語』賢媛第十九に見える女性を批評した説話である。

謝暹絶重其姊、張玄常稱其妹、欲以敵之。有濟尼者、竝遊張、謝二家。人問其優劣？ 答曰、「王夫人神情散朗、故有林下風氣。顧家婦清心玉映、自是閨房之秀。」^{*26}

謝遏絶だ其の姊を重んじ、張玄常に其の妹を稱し、以てこれに敵さんと欲す。濟尼なる者有り、竝びに張謝二家に遊ぶ。人其の優劣を問ふ。答へて曰く、「王夫人は神情散朗、故より林下の風氣有り。顧家の婦は清心玉映、自ずから是れ閨房の秀なり」と。

字面から見れば、「清心玉映」「閨房之秀」も肯定的な評論であるが、しかしもし人物評價の推移をもとに、晉の人々がこぞって玄學的氣質を尊んでいたことを前提としてこの説話を讀んだなら、これが實際には遠回しに貶めていることが理解できるであろう。「神情散朗」（精神がのびのびしている）であり、そのうえ「林下風氣」（竹林の七賢のような氣性風格があること）と評されたのであるから、竹林の七賢のような名士と等しいと見られた王夫人こそ、當時の人々が贊美し尊んだ氣質であったのである。

注

- * 1 魯迅『中國小説史略』第七篇「世説新語與其前後」。
- * 2 拙稿「劉義慶傳譯注」『大東文化大學漢學會誌』第四十號を参照。
- * 3 傳説では、江西の豊城の地下には龍泉と大阿の寶劍が眠っているといい、後世「豊城の劍」を傑出した才能を贊美するときや、傑出した人物が識者に見いだされるのを待っている意味によく使用するのは、『晉書』張華傳に見える通りである。
- * 4 『中國小説史略』第七篇「世説新語與其前後」。
- * 5 清の黃伯思『東觀餘論』、紀昀『四庫全書總目提要』、餘嘉錫『四庫提要辯證』を参照。
- * 6 董儀『世説新語跋』。
- * 7 品藻第九の25。
- * 8 品藻第九の37。

- * 9 『晉書』卷七七は「君」に作る。
- * 10 品藻第九の35。
- * 11 『晉書』卷七七殷浩傳及び品藻第九の38。
- * 12 容止第十四の27。
- * 13 識鑑第七の6。
- * 14 賢媛第十九の12。
- * 15 文學第四の53。
- * 16 德行第一の13。
- * 17 德行第一の11。
- * 18 雅量第六の29。
- * 19 豪爽第十三の8。
- * 20 品藻第九の61。
- * 21 任誕第二十三の42。
- * 22 任誕第二十三の54。
- * 23 『美學散步』上海人民出版社一九八一年版。
- * 24 とともに雅量第六の28。
- * 25 賞譽第八の16と8。
- * 26 賢媛第十九の30。